

プラトンの魂の構造

The structure of Plato's psyche

今、井、直、重

(1) 魂とチュモス

プラトンのみならず魂 (*ψυχή*) は、ギリシア人にとっては最も関心のある研究課題であった。ホメロスの作品のうちにもチュモス (*θυμός*) という語が表われている。チュモスは人間のからだのうちに働く精神的能動的な力を意味していた。かかる精神力を担うものは心であり、心のうちに働く血液であると考えられた。心のうちに存する血の働きを魂であると考えたのである。言語学的に言えば *θυμός* は *θυμόω* という動詞から生じた名詞であって、*θυμόω* は働きをひきおこす力である。*θυμόω* がなければ人は死んでいるか、眠っているのである。*θυμόω* は心の働きである (*θυμόωεν τῆς ψυχῆς*)^①。チュモスは人間の心の働きを示すものとして用いられたのである。プシュケーは心生命の源である呼吸のような意味に用いられていた。*ψυχή* は *φύχω* すなわち呼吸という語より出たものであり、*φύχω* は呼吸するという意味をもっている。呼吸することは生命を有するものの特徴であり、それは人間を生かすものであり、生かすことによって、働かすのである。かくして、チュモスとプシュケーは表裡一体をなす人間の精神作用である。

ホメロス (Homeros, 紀元前9世紀) の時代における古代ギリシアにおいては、人々はチュモスは精神的な働きであって、人間の精神作用である感情、特に血の気の多いことに関係する意欲等を表わす語でもあり、プシュケーは人間の生死を分つめじるしとなる呼吸を与える生命の源、生命の本質を表わす語であった。この二つのものについての最も大きい区別は、この二つのものが、時間的にみて、チュモスは有限であり、プシュケーは無限であるということである。

チュモスは肉体とともに生滅する現世的な心のうちに存する血液の働きにすぎないのであるが、プシュケーはそれ自身不滅の実在として、人間の身体から離脱しても存在し得るものである。プシュケーが肉体に生命を与えている限り人間は生きているのであるが、プシュケーが生命を与えなくなると、人間は死滅するのである。もちろん、それは単なる肉体の死滅である。現世においては、プシュケーは身体とともにあるのであるが、肉体の死滅とともに、それは現世から離れて、ハイデース (*Ώιδης*) の影の世界 (*εΐδωλον*) にはいるのである。それゆえに、プシュケーは現実世界の生命の泉であるとともに、それはまた影の世界の存在者である。現実の世界においては、肉体の繫縛を受けて不自由であるが、ハイデースの世界においては、かかる拘束を離れて自由であり、純粹無垢な存在となるのである。しかしハイデースにおいては、それは純粹無垢であるだけに、何等他のものによる煩累がないので、無意識 (*ἀκήραιοι*) であり、無意味 (*ἀφραδής*) であり、すべてのものに関して無感覚であり、すべてのものは忘却の淵に投げ込まれ、ただ沈黙と暗黒があるのみである。かくして、プシュケーは肉体のうちに存してそれに生命を与えるものであるが、それに先だって存在し、また、それから離れて存在するところのものである。それは生命体であり、自らは他のものによって生かされるものではないが、自ら働くことによって他を生かすものである。それは自己原因 (*causa sui*) ともいうべきものである。自己原因は決して物質的なものではあり得ない。というのは、物質が動くのは常に他のものによってであって、自らによって動くものではないからである。かくして、自己原因たるプシュケーは精神的なものでなければならないのである。生命を有するものは精神をもつものである。肉体が生きている限り、精神はそのうちに存する力である。それは生命の似姿 (*αιωνος εΐδωλον*) である。ギリシアの詩人ピンダロス (Pindaros, 518-438 B. C.) は次のごとく述べている。肉体は地上のものであるが、プシュケーは神より由来する。肉体は死によって破滅するが、プシュケーはハイデースの国に至り、肉体に宿りしときの行為に対して峻厳なる審判を受け、罪ある者はタルタロス (*τάρταρος*) と称する深淵に投げこまれ、拷問にかけられるのであるが、正しい行為をしたものは永久に日の没することのないところの樂園において楽しい日を送ること

ができるのである。ここにおいて、次のことを発見することができる。すなわち、ホメロスにおいては、肉体を離れたプシュケーは無意識であり、無感覚であったが、ピンダロスにおいては、罪の意識が加わり、道徳的意義が表われてきたことである。プシュケーが精神的性格を濃厚にして、その品質が価値評価されるに至っていることである。^②

オルフェウス教 (Orphic) の宗教的信仰について、ピタゴラス学派 (Pythagoras school) の哲学において、魂の永生の思想があった。ピタゴラス学派においては、魂はそれ自ら無限であり、始めなく終りなきために永生であるのではなく、一つの肉体から他の肉体に移って、たえず再生 (*παλιγγενεσία*) があるがゆえに永遠であると考えた。^③魂は不死であるがゆえに、再生によって永生であるということが出来る。プラトンは、このピタゴラス学派の魂の不死説に、ヘラクライトス (Herakleitos, 540 B. C.) の反対なるものは反対なるものからのみ生ずる^④という教説を結合している。生と死とは互いに相反するものである。それゆえに、生は死より生ずるものである。それについてプラトンは、パイドン (Phaidon) において、次のごとく述べている。「生ずるものは単に他のものからではなく、反対のものから生ずる。美しいものは不美なものに反対であり、正しいものは不正なものに反対である。かくのごとく何等かの反対考をもっている限り、そのものは必ずそれに反対のものから生ずる。たとえば、何かより大きくなる場合には、必ずその前に一層小さかったものから後に大きくなるのであり、一層弱いものは一層強いものから、より速いものはより遅いものから生ずるのである。人間が死ぬのは生まれるものからであり、生まれるのは死ぬものがあるからである。生と死とは反対であるがゆえに、一方は他方から生じ、他方が生ずるのは一方からである。それゆえに、生者は死ぬとともに、死者はまた生まれねばならない。再生はこの理論から可能であるのみならず、また必然的であると考えられる。かくのごとく再生が可能であるためには、死後にも一つの生活があり、死は単なる無ではなく、繰り返された生でなければならない。死後においても、生をもつものは肉体ではなく、精神であるから、魂は永生でなければならない。^⑤」

プラトンにおいては、魂は不死 (*ἀθάνατον*) であり、不滅 (*ἀνώλεθρον*) であり、

不可視 (*ἀόρατον*) であり、永生的で理性的なるものである。^⑥ピタゴラスにとっては、魂は不死であり、再生するものであるが、プラトンにとっては、魂の永生は超越的、先験的 (*apriori*) であり、それは自己原因として、あらゆるものに先だって、肉体にも先だって存在するものである。それは最初肉体を離れて、それ自体として存在したのである。ピタゴラス学派にとっては、魂は肉体のうちに再生して輪廻することによって永生するものであると考えられているのである。それゆえに、ピタゴラス学派においては、再生思想が第一義的であるが、プラトンにあっては、必ずしもそうではない。プラトンにとっては、魂の永生が第一義的であった。これについてバウエル (Bruno Bauer, 1809-82) は次のごとくのべている。すなわち、ピタゴラス学派においては、魂の輪廻思想が主となっていて、永生思想は従となっているが、プラトンにおいては魂は本来永遠のものであるから、永生するのであると説いている。^⑦魂はどこまでも人間の主体となって、身体を支配する主体性をもっているのである。それは身体を超越して、それ自体として先住するものである。プラトンはパイドンにおいて次のごとくのべている。「魂は人間が死しても、それ自体は死せずして存在し、且つある力と知恵とを有する。^⑧」かくて、プラトンの教説では、魂は単なる蔭の世界の存在ではなく、肉体を離れても、自らの力と知恵とをもった存在なのである。プラトンによれば、魂は人間の生まれる以前に存在するものであるから、それは人間の死後においても存在することは当然なことである。人間の魂は、ホメロスの考えたごとく、一つの呼吸、息吹のごときものではなく、それ自らによって存在するものである。時と所によって様態を異にするようなものではなく、美そのもの、善そのもののごとく、存在そのものである。存在するそれらはいつでもそれ自体として、それ自らに同じ姿を有し、そのものとして常にそれ自らを維持し、何等の変化を受けないような仕方において存在するのである。かくて、魂の存在は一つのイデア的な存在である。知るものと知られるものとは同質的でなければならないので、魂の力は永久不変のイデアを知ることができるのである。魂がかくイデアを知ることができるのは、魂がイデアと同質的であるからである。魂はイデアと同質的存在でなければならないのである。プラトンの魂の永生説はイデア論に連なるものである。このことはシュラ

イエルマッヘル (Schleiermacher, 1768-1834) も指摘するところである。^⑨ 魂は肉体の変化と生滅を超越して永久不変のイデア的な存在である。魂の永生思想は、プラトンのイデア論に基づくものであるということが看取される。

(2) 魂とイデア

プラトンにおいては魂はそれ自体永遠性を有し、永生は魂の本質的属性である。魂は永久不死であり、死は肉体の破滅であって、魂の消滅ではない。魂の永遠性を証明するために、プラトンは魂の非合成説を説いている。まず事物は合成されるもの (σύνθετα) と非合成的なもの (ἀσύνθετα) とに分たれる。前者は合成的であるがゆえに、不断に変化するのに対して、後者は非合成的であるがゆえに、常に同一にして不変である。前者が可視的であるのに反して、後者は不可視的である。すなわち、前者は感性的な個物であるが、後者はイデア的である。かくして、プラトンはあらゆる存在を可視的な感性的存在と不可視的なイデア的存在とに分ったのである。肉体は可視的感性的な存在であるから死滅すべきものであるが、魂は不可視的イデア的存在、非合成的存在であるから永生的であると結論した。しかし、ここにプラトンの論理の飛躍があるとして非難がある。魂が非合成物であるか否かについて証明がなされていないのである。^⑩

プラトンが最も多く影響を受けたと思われるピタゴラス学派においては、魂は琴と弦との調和 (ἁρμονία) のごときのものであり、この調和は合成されたもの (ἀσύνθετον πράγμα) である。魂が肉体的において緊張せられているものの調和であるとすれば、魂は肉体が減びて緊張がなくなれば、それと同時に減び去らねばならなくなるのである。かかる非難に対して、プラトンは、魂は知恵の能力をもっている。それはイデアを知る能力をもっている。イデアを知ることがアナムネーシス (ἀνάμνησις) である。イデアを知ることがアナムネーシスであるためには、魂は肉体に先だって存在していなければならないのである。調和のみを魂の特性とすれば、肉体が存在して後、その肉体内の調和が生ずるがゆえに、肉体が存在して後に、その秩序と調和としての魂が生ずることになる。単なる調和は、その調和をひきおこすものに決して反対するものがないのであ

るが、思慮ある魂 (*φύλη φρόνημη*) は肉体が反対してもそれを支配するものである。^⑩ さらに次のごとき疑問がひきおこされる。魂は肉体に先だって存在し、それが宿っている個々の肉体よりも長く生きるであろうけれども、このことは必ずしも不滅なることを意味するものではなく、幾度か肉体のうちに転生しているうちに次第に疲労して、ついには全く消失してしまうのではなからうかということである。この疑問に対してプラトンは、すべての事物にはイデアがあって、事物はこのイデアを分有 (*μετέχειν*) し、それに従ってその名を得ている。相反するイデアは結合しない。大のイデアは小のイデアと同時に存在することはできない。火のイデアは決して水のイデアと結合しないし、雪のイデアは決して熱のイデアと結合しない。魂についても同様のことがいわれる。身体に熱が生ずることによって病気がおこるように、魂が身体を占有する (*κατέχειν*) ことによって、それが生かされるのである。魂は生のイデアである。死は生に相反するものであるから、身体が生みのイデアである魂を分有する限り、死のイデアを容れる余地がないので、身体は生かされる。身体に死が迫ってくると、魂はそれに所を譲って退くのである。それゆえに、死滅するのは肉体であって魂ではない。魂は生のイデアであるから、絶対に死のイデアと共存することはできないものである。人間に死が迫ってくると、人間の死すべき部分は死滅し、死せざる部分は、健全なるままで、破滅しないで去ってゆくのである。^⑪

(3) 魂とアナムネーシス

プラトンは魂とアナムネーシス (*ἀνάμνησις*) との関係において、魂の不滅を論証している。「魂は不滅であって度々生まれてきたものであり、現世のものも、ハイデースのものも、あらゆるものを見て知っており、それゆえに、学び知っているのではない。徳についても、他のことについても、前に知っているところのものを想起しているのであるということが出来る。探究するといひ、学知するといひのもつまり想起なのである。」^⑫

アナムネーシスとは、魂がそれ自らの働きによって、自らにもてるものを知ることである。魂の本質を考え出すことが想起なのである。これについて、「人は知っていることも知らないことも探究することは不可能である。何となれば

知っていることは探究する必要がなく、また知らないことは何を探究すべきかを知らないからである」というエリステイコスの詭弁に対して、プラトンにては、知るということは魂の働きである。魂は不滅であるから常に知っており、生まれながらにして知っているのである。知らないというのは魂があたかも忘却のごとくにおおいかくされていることにほかならない。このおおいを取り去って、魂の本然の姿に立帰ることが知ることである。アナムネーシスはおおわれたものを取り除くことである。学ぶことも教えることも、すべてはアナムネーシスである。プラトンはフェイドロスにおいて次のごとくにのべている。「真実の臆見 (δόξα) はそれが静かにある間は、ものを美しくよいように見せているが、長い間じっとしていないで、人間の魂から逃げ去ってしまうのである。それゆえに、人がそれを原因の推理 (αίτιας λογισμός) によって縛るまでは、しっかりした知識にならない。この縛るということが原因の推理なのである。¹⁴」

臆見は知と無知との中間にあって、また知らないことを知ることの素地をなすものである。しかし、それが一つの確実な知識となって永続するためには、原因の推理によって縛られねばならないのである。原因の推理とはロゴスを与えることである (λόγον διδόναι)。それは感覚的な知識ではなく、論理的に推究しつくされた知識である。このことについては、プラトンは次のごとくのべている。「人間は多くの感覚から推理によって一つの綜合されたもの (ἐν λογισμῷ συναϊρούμενον) にたどりつき、イデアに関与しなければならぬ。イデアに関与することによって知識を把握する過程がアナムネーシスである。このように想起 (ἀπόμνημα) を正しくする人は完全な人間になるのである。¹⁵」かくてアナムネーシスとは、感覚の世界にとどまるものではなく、ロゴスモスによって、イデアの世界にまでいたる、イデアを直観する能力である。イデアの世界は個物によって暗示されるのであるが、個物から得られるものではなく、個物と峻別されているのであるが、個物を機縁として知られるのである。連想作用においては、個物が個物をよびおこすのであるが、想起においては、部分が全体をよびおこすのである。そこでよびおこされたものは全体であり、根拠であり、真の実在である。人が魂の本性に従ってイデアを直観するのである。アナムネーシスとはイデアの直観であり、イデアの直観は魂の本質的属性なのである。¹⁶

感覚と想起との区別について、感覚とは魂が身体とともに受けるところのものであり、アナムネーシスとは、魂が身体から離れて、それ自体として働くことによって受けるところのものである。このことは、魂が身体とは別に、それ自らの生活をもっていることを前提とすることなしには不可能なことである。アナムネーシスによって、魂の永生が証明されるのである。人は現実の生活において、その生活の仕方が正しくないために、神聖なるイデアを忘却しているのである。しかし、このイデアの世界のことを想起する人は理性の翼を有する愛知者、すなわち、哲人である。イデアの世界は現実の世界と峻別されているから、かえってこれを恋慕憧憬するのが魂を有する人間の姿である。このイデアを恋慕する魂の働きがエロース (ἔρως) である。エロースはよいものがひきあう働きである。というのは悪しき人は悪しき人と親密に交わるほど敵になるように思われる。似たものが似たものとひきあうというものではない。善人が善人とひきあうのであって、悪人は善人とも悪人とも決してひきあうものではないのである。それゆえに、よいものとよいものが、よくある限りにおいてひきあうのである。^⑩

しかし他方において、よいものがよいものとひきあうだけではなく、人は自分の欠けたところのものにあこがれ慕うのである。アナクサゴラス (Anaxagoras, 500-428 B. C.) は似たものが似たものを引くといい、エンペドクレス (Empedocles, 490-430 B. C.) は相反するものが互いにひきあうという。どちらも真である場合がある。病人と医師とひきあうのは、病気という健康に欠けるところの者が充たされることを願って、病人は医師にひかれてゆくのである。善きものの欠如は、そのもののゆえに、かえって善きものへの憧憬を強めることになるのである。すでに賢い人はもはや賢くなろうとはしないし、全く無知なる者も、そのゆえに、知を愛しないであろう。無知ではあるが全く無知ではなく、また賢くあるが、全く賢いと考えて満足していない人のみが知識にあこがれる愛知者であり得る。それゆえに、エロースは自己に欠けたものを求めあこがれることでなければならない。エロースは愛知であり、愛知者の魂の働きである。善きものの永久の所有に向かうあこがれであり、これによってよりよきものとなり、イデアを分有すること (μετέχειν) ができるのである。エロースは、欠如

性のゆえに、かえってあこがれの働きが熾烈となるものである。エロースはダイモン (*δαίμων*) のごとく、それは神でもなく、人でもないところの中間的働きである^⑩。ソクラテスには見られなかった知と無知との中間者の存在が、プラトンによって導入されたのである。ソクラテスは中間者を排除する排中律を厳守したのであるが、プラトンは無知から知への愛としてエロースの理論を創設した。かくしてプラトンはエロースが人間と神とを媒介する働きであることを教えた。それゆえに、エロースは魂の能力であって、それ自体は善でも悪でもないが、善にあこがれ美を追求する働きである。かくして、魂の働きはエロースとして表われることによって、永遠の世界と生成消滅の世界とを媒介するものとなった。魂は永遠なるものを追求する働きをもつものである。アナムネーシスは永遠なる魂自体の本性であるが、エロースは魂の永遠なるものへのあこがれの働きである^⑪。

(4) 魂とエロース

アナムネーシスは認識であるが、エロース (*ἔρως*) は愛求の至情として把握される。アナムネーシスはプシュケー (*ψυχή*) のロゴス的な側面であるが、エロースはプシュケーのパトス的な側面として考えられる。エロースはその本性上、善でも不善でもない。それは不完全なものが完全なるものへ、善なるものへのあこがれ、追求である。至高なる真理へのあこがれの働きである。それは媒介者であって、真知への協力者 (*συνεργόν*) である。エロースによって、人は次第に高みへと昇ってゆく。かく考えるとき、エロースは単に人間をして永遠の世界に至らしめる仲介者として、魂の働きであるのみではなく、それはまた他方において、魂のうちに美わしきもの、よきものを生み出し、魂を美化し、善化して、それを浄化するものである。エロースは美わしきものへのあこがれとともに、魂のうちに美わしきものをもたらす作用、美を生む作用である。美わしきものを生むものは、それ自体が美わしくなければならない。不美のものからは美わしいものは生まれぬ。不美なるものは何ものをも生む力をもたない。ものを生産する力は美わしい力である。美わしいものは永遠なるものであり、不死なるものである。ものを生む力は生ける限りあるものであって、

生けるものは永遠につづく。かくして、美を追求するエロースの働きは、そのあこがれの情から美を生み出す生産的な積極的な働きに発展してゆく。アナムネーシスにおいては、ただアイデアを想起するのみであって、それは観照の哲学であった。かかる観照的態度は、エロースにおいてアイデアを実現せんとする生みの哲学に発展していったのである。徳は生まれつき備わるものでも、学んで得られるものでもない。神から享けた資質によって生ずるものである。徳は神の恩寵 (θεία μοίρα) によるものである。資質を条件として、魂がそのうちに生産したものが徳である。エロースはこの徳を生む働きである。それは単なる論理ではなく、実践であり、生産である。生々として活発に働く実践である。ひとたび永遠の真理を見れば必ずその真理を実現しようとする欲求として、また真理を生み出そうとする努力として発動する。それゆえに、アナムネーシスは徳の観照の働きであり、すでにでき上がったものを明るみに出す作用であるが、エロースは徳を生み出し、永遠なるものを生産する働きである。かくてエロースは魂の生みの働きである。^③ エロースはアイデアを単に観照するのみでなくして、これを生産、現出するものでなければならない。魂の働きはアナムネーシスとエロースであるが、真理は魂によって認識されるのみでなく、またそのうちに生産されるものである。エロースは美しいものにあこがれ、美しいものを魂のうちに生産する作用である。プラトンの哲学がアナムネーシス的観照の哲学からエロース的生産の哲学へと進展したのである。エロースは人間の行為における美しい発動力である。人間の仕事はこのエロースなしには何もものなしとげられないのである。エロースは神々しい働きの源である。^④

(5) 魂とヌース

人間の魂は三つの部分に分たれている。このことは比喩をもって次のごとくのべられている。神々に属する魂は馬も馭者もすべてそれ自身としてよく、よいものから生まれている。しかし、人間の魂はまるで正反対の二頭の馬を御してゆかねばならない。一頭の馬は美しくてよく、またそのようなものから生まれているが、他方の馬はその正反対の性質をもち、正反対のものから生まれている。一頭の馬は正しく均斉がとれ、頭は高く、鼻筋が通り、色白く、目黒く、

思慮の徳と羞恥心をそなえ、名誉を尊び、真実を愛し、鞭うつことなくして働き、命ぜられるままに走る。これに反して、他方の馬はひねくれて肥り、猪首で色黒く、目は血走っており、粗野、暴慢であって、突いたり、打ったりしても動かない。もし恋人を見て、その魂が愛慕の情で刺激されると、御者に忠実な馬は羞恥心にひかれて、恋人にとびかかることを自制するが、他の悪しき馬は御者の叱咤にかかわらず、いちずにとびかかってゆく。これを見て御者は手綱をひく。一方のよき馬ははじらうが、他方の悪しき馬は依然としてたけり立っている。よき馬は人間の精神を表わす語として、チュモス(θυμός)が用いられ、精神作用のうちでも気概を表わし、また悪しき馬は欲情(ἐπιθυμία)を意味している。人間の魂は理性と気概と欲情とから成立していることを国家が政治家と武人と庶民とから成立していることにたとえている^㉞。

前掲の比喩における御者は理性であり、善き馬は気概(θυμοειδής)であり、悪しき馬は欲情(ἐπιθυμητικόν)である。魂の全体は御者と二頭の馬とからなっているのである。全体として魂を動かすものはエロスである。魂はエロース的であるから翼をもっている。翼をもつことによって、魂は無限の彼方を目指して努力し、神的なるものにたずさわることができるのである。神はすべての事物が美しくあること、悪の全くなからんことを願い現実のすべてのものが安定なく無秩序に動いているのを見て、それに秩序を与えようとする。最も完全なる事物は最も美しいものから成り立っている。最も美しいものは理性をそのうちにもっている。理性あるものは、理性なきものに比して全く美しく見えるものである。理性は魂のうちにあって、魂以外の何ものうちにも存在しない。神は魂のうちに理性をおき、理性は魂以外の何ものの中にも存し得ない。また神は身体のうちを魂をおいたのである。この世界は神の恩寵によって魂をもった生きた動態(ζῶον ἔμψυχον)であるといえることができる^㉟。魂の本質は理性をもち、それによって指導され、秩序を保ち、イデアと結合することである。理性は魂のうちにおける神の似姿である。神が万物を創造したとき、自己に最も似せてつくった美しい姿が魂のうちにおける理性(νοῦς)である。それゆえに、魂は現実世界において神に最も近いものである。現実界の事物をイデアに結びつけるのは魂の働きである。魂は人間を神的世界にあるイデアに結びつけ

るものである。魂が永遠であり、無限であるのは、かくのごとくにして、魂が神性を有するからである。魂の働きは神の働きである²⁹。

(6) 魂とテオス

神は善なるものでなければならない。神は善そのものである。神は善のアイデアである。神も善のアイデアも不変な永遠の存在者である。神はあらゆる生成、生長の源泉であるが、善のアイデアも事物を生成発展させる働きをするものである。善のアイデアは単なる超越的な存在であるというよりも生成の源として、動的なる実在であり、それはあらゆる存在の動力因であり生命因である。魂もまた自ら活動する生命力である。かくて魂は神に連なるものである。それは神(θεός)である。ヌース(νοῦς)は魂のうちに存する神にほかならないのである。ヌースは万物の王であり、魂における支配者である。ヌースは万物の創造者であるとともに、その指導者である。魂のうちなるヌースは魂の働きの源泉となり、魂を指導する魂の主宰者である。ヌースは魂の生命の泉である。人間の魂はそれを分有することによって神の世界に連なり、その意図に従って行動することができるのである。人間が正しく生きることができるのは魂のうちに内在する魂の指導者である神(θεός)の指図によるのである。それは内在神であるヌースの教導によるものである。人間の行為の唯一のよりどころとしての魂の主宰者たるテオスの命に従うことによって、人は正しく生きることができるのである。これについて、プラトンは比喩的に「われわれ人間は神の玩具としてつくられたのか、あるいはまじめな目的をもってつくられたのか、ともかくわれわれは神の操人形である³⁰」とのべている。人間が神の意思によってつくられ、神の意思のままに操られることは、人間が神の創造物にふさわしくなることであり、人間を有徳にするものである。そのためには内在神であるヌースの指図に従って行為をなさねばならない。プラトンは神の善意と正義に従って正しく人間生活をするを人間たるものの存在の本義であると考えたのである。善のアイデアは神であり、善のアイデアは神の表現である。プラトン哲学の中核をなす善のアイデアと魂との関係は神において統一される。神に近づかんとすれば、人はできる限り神に類似し、神に等しくならなければならない。というのは、

同様なものが同様なものを、等しきものが等しきものを認識しうるからである。人間は不完全であり、不善に充ちた存在ではあるが、神の指図に従い、神の意図を尊重する限りにおいて、神に近づくことができる。人間が神の操人形といわれるのは、この意味においてである。

プラトンは二つの要素である善のイデアと魂とを神において統一せんとしたのである。神は善のイデアといわれるが、神はそのままイデアではない。神は自ら働く能力であり、生きた力である。また、神は魂の本拠であるといわれるが、魂は善も不善も含むものである。神は善であって、不善を含まない。しかし神は人間のことがらに配慮をもち、そのために働くものでなければならない。神は善のイデアとして働くのである。善のイデアは神の力として働くものである。永遠なるものは不滅の働きをなす。神は不滅であり、魂は不滅であることによって神と連なるものである。魂はイデアを指向し、イデア的に働く限り、神の指示する方向を常に念慮せねばならないのである。イデアと魂とがよく結合し得るのは神の配慮によるものである。神は善のイデアと魂との統一者として、常に人間の行為のイデア的指向を希念しているのである。

(注)

- ① Platon, *Cratylus*, 412e.
- ② Nägelsbach, *Homerische Theologie*, VII, SS. 17-20.
- ③ Bauer, *Der ältere Pythagoreismus*, S. 171.
- ④ Diels, *Vorsokratiker*, sec. 52 A4.
- ⑤ Platon, *Phaidon*, 70e-71d.
- ⑥ Apelt, *Platons Phaidon*, S. 139.
- ⑦ Bauer, *op. cit.*, S. 172.
- ⑧ Platon, *Phaidon*, 70b.
- ⑨ Bonitz, *Platonische Studien*, S. 309.
Schleiermacher, *Phaidon*, Einleitung.
- ⑩ Platon, *Phaidon*, 70b.
- ⑪ *Ibid.*, 94b.
Apelt, *op. cit.*, S. 144.

プラトンの魂の構造 (今井)

- ⑫ Platon, Phaidon, 106e.
- ⑬ Idem., Menon, 80e.
- ⑭ Idem., Phaedrus, 245b.
- ⑮ Idem., Menon, 98a.
- ⑯ Idem., Phaedrus, 249b.
- ⑰ Idem., Lysis, 215a.
- ⑱ Idem., Symposium, 218b.
- ⑲ Barth, Die Seele in der Philosophie Platons, SS. 49-61.
- ⑳ Platon, Politeia, 499e.
- ㉑ Stewart, The Myth of Plato, P. 337.
- ㉒ Platon, Politeia, 580d.
- ㉓ Idem., Timaeus, 30ab.
- ㉔ Taylor, Plato, P. 332.
- ㉕ Platon, Nomoi, 644d.
- ㉖ Ibid., 716c.
- ㉗ Raeder, Platons Philosophische Entwicklung, SS. 280 ff.